

エステルの 書

¹ アハシュエロスの時代のことである。これは、インドからエチオピアに至る百二十七州を治めた、あのアハシュエロスである。

² そのころ、アハシュエロス王はスサの宮殿にある王座に着いていた。

³ 治世の第三年、王はすべての高官と家臣のために祝宴を催した。ペルシアとメディアの軍人、貴族、諸州の長たちも王の前に列席した。

⁴ 王は百八十日にわたり、その栄光ある王国の富と、比類ない威光の輝きを誇示した。

⁵ その期間が終わると、王はスサの宮殿にいた者すべて、身分の高い者にも低い者にも、王宮の園の中庭で七日間の祝宴を催した。

⁶ 白と青の幕が、上等の亜麻布と紫のひもで銀の輪と大理石の柱に結び付けられていた。赤、白、黄、黒の大理石を敷き詰めた床には、金と銀の寝椅子が置かれていた。

⁷ 飲み物はさまざまな形の金の器で振る舞われ、王の気前のよさにふさわしく、王室のぶどう酒が惜しみなく供された。

⁸ 飲酒は法令によって強制されなかった。王が宮廷のすべての役人に、各人の望むままにさせるよう命じていたからである。

⁹ 王妃ワシュティも、アハシュエロス王の王宮で女たちのために祝宴を催した。

¹⁰ 七日目、ぶどう酒で王の心が陽気になると、王は御前に仕える七人の宦官、メフマン、ビズ

タ、ハルボナ、ビグタ、アバグタ、ゼタル、カルカスに命じた。

¹¹ 王冠をかぶった王妃ワシュティを御前に連れて来て、民と高官たちにその美しさを見せるためであった。彼女はたいそう美しかった。

¹² しかし王妃ワシュティは、宦官たちが伝えた王の命令に従って来ることを拒んだ。王は激しく怒り、憤りが内に燃え上がった。

¹³ そこで王は、時勢に通じた知者たちに諮った。法と裁判に通じた者に相談するのが、王の慣例だったからである。

¹⁴ 王の側近には、王に直接まみえることを許され、王国で最高の地位に着いていたペルシアとメディアの七人の高官、カルシェナ、シェタル、アドマタ、タルシシュ、メレス、マルセナ、メムカンがいた。

¹⁵ 王は尋ねた。「王妃ワシュティは、宦官たちを通して伝えたアハシュエロス王の命令に従わなかった。法に照らして、彼女をどう処すべきか。」

¹⁶ メムカンは王と高官たちの前で答えた。「王妃ワシュティが背いたのは、王だけではありません。アハシュエロス王の全州にいる、すべての高官とすべての民にも背いたのです。」

¹⁷ 王妃の行いはすべての女に知れ渡るでしょう。『アハシュエロス王は王妃ワシュティを御前に連れて来るよう命じたのに、彼女は来なかった』と聞けば、女たちは夫を侮るようになります。

¹⁸ 今日にも、王妃の行いを聞いたペルシアとメディアの貴婦人たちは、王の高官たちに同じことを言い立てるでしょう。そうなれば、侮りと怒りが絶えません。

¹⁹ 王がよしとされるなら、王命を発し、変更できないペルシアとメディアの法令として記してください。

い。ワシュティは二度とアハシュエロス王の前に出てはならず、王はその王妃の位を、彼女よりふさわしい女にお与えください。

20 王の勅令が、この広大な王国の全土に布告されれば、身分の高い者から低い者まで、すべての妻が夫を敬うようになるでしょう。」

21 この助言は王と高官たちの心にかない、王はムカンの言葉どおりにした。

22 王は全州に、それぞれの州の文字、それぞれの民の言語で書状を送り、すべての男が自分の家を治め、自分の民族の言語を用いるよう命じた。

2

1 これらのことの後、アハシュエロス王の怒りが静まると、王はワシュティのこと、彼女がしたこと、そして彼女について定められたことを思い起こした。

2 そこで王に仕える侍臣たちは言った。「王のために、容姿の美しい若い処女たちを捜させましょう。」

3 王国の全州に役人を任命し、美しい若い処女たちをスサの宮殿の後宮に集め、女たちを預かる王の宦官へガイの管理下に置かせてください。また、彼女たちに身支度の品を与えさせてください。

4 そして王の心にかなう娘を、ワシュティに代わる王妃としてください。」この提案は王の心にかない、王はそうにした。

5 さて、スサの宮殿にモルデカイというユダヤ人がいた。彼はベニヤミン人キシユの子シムイの子ヤイルの子であった。

6 このキシユは、バビロンの王ネブカデネザルがユダの王エコニヤとともに捕らえ移した捕囚の民とともに、エルサレムから連れ去られた者であった。

⁷ モルデカイは、叔父の娘ハダサ、すなわちエステルを育てていた。彼女には父も母もなかった。この娘は姿も顔立ちも美しかった。父母の死後、モルデカイは彼女を自分の娘として引き取ったのである。

⁸ 王の命令と法令が布告され、多くの娘たちがササの宮殿に集められてヘガイの管理下に置かれたとき、エステルも王宮に連れて来られ、女たちを預かるヘガイの管理下に置かれた。

⁹ この娘はヘガイの心にかない、その好意を得た。彼はすぐに身支度の品と特別な食事を彼女に与え、王宮から選ばれた七人の侍女も付けた。そして彼女と侍女たちを後宮の最良の場所に移した。

¹⁰ エステルは自分の民族も親族も明かさなかった。モルデカイが、明かしてはならないと命じていたからである。

¹¹ モルデカイは毎日、エステルが無事であるか、これからどうなるかを知ろうとして、後宮の中庭の前に行き来した。

¹² それぞれの娘がアハシュエロス王のもとへ行く番は、十二か月に及ぶ身を清める期間を終えた後に来た。その期間は、六か月を没薬の油で、さらに六か月を香料や女の身支度の品で整えるものだった。

¹³ 娘が王のもとへ行くときには、後宮から王宮へ携えて行きたいものは何でも与えられた。

¹⁴ 夕方に王のもとへ入り、翌朝には、側女たちを預かる王の宦官シャアシュガズの管理する第二の後宮へ移された。王が彼女を気に入り、名を呼んで召さない限り、二度と王のもとへ行くことはなかった。

¹⁵ モルデカイが娘として引き取った、叔父アビハイルの娘エステルの番が来たとき、彼女は女たち

を預かる王の宦官へガイが勧めたもの以外、何も求めなかった。エステルは見る者すべてから好意を受けた。

¹⁶ エステルがアハシュエロス王の王宮へ迎え入れられたのは、王の治世第七年、第十の月、すなわちテベテの月であった。

¹⁷ 王はどの女よりもエステルを愛した。彼女はほかのすべての処女にまさって王の好意と慈しみを受けたので、王はその頭に王冠を置き、ワシュティに代わる王妃とした。

¹⁸ 王はすべての高官と家臣のために、エステルの祝宴と呼ばれる盛大な宴を催した。また諸州に休日を布告し、王の気前のよさにふさわしく贈り物を配った。

¹⁹ 処女たちが二度目に集められたとき、モルデカイは王の門に座っていた。

²⁰ エステルはモルデカイに命じられたとおりに、まだ自分の親族も民族も明かしていなかった。彼女は養育されていたころと同じように、モルデカイの言いつけに従っていた。

²¹ そのころ、モルデカイが王の門に座していると、入口を守る王の宦官ビッグタンとテレシュの二人が怒りを抱き、アハシュエロス王に手を下そうと企てた。

²² この企てを知ったモルデカイは王妃エステルに知らせ、エステルはモルデカイの名によって王に報告した。

²³ この件は調査され、事実であると判明したので、二人は木に掛けられた。このことは王の前で年代記に記された。

3

¹ これらのことの後、アハシュエロス王はアガ

グ人ハメダタの子ハマンを昇進させ、重用し、王とともにいるすべての高官より高い地位に就かせた。

²王の門にいた王の家臣たちは皆、ハマンの前にひざまずき、ひれ伏して敬意を表した。王が彼についてそう命じていたからである。しかしモルデカイは、ひざまずくことも、ひれ伏すこともしなかった。

³そこで王の門にいた家臣たちはモルデカイに言った。「なぜ王の命令に背くのか。」

⁴彼らは毎日語りかけたが、モルデカイは耳を貸さなかった。そこで彼らは、その言い分が通るかどうかを見るため、ハマンに告げた。モルデカイが自分はユダヤ人だと明かしていたからである。

⁵ハマンは、モルデカイが自分の前にひざまずかず、ひれ伏もしないのを見て、激しい怒りに満たされた。

⁶だがモルデカイ一人に手を下すだけでは足りないと考えた。モルデカイの民族を知らされていたので、ハマンはアハシュエロスの全王国にいるすべてのユダヤ人、すなわちモルデカイの民を滅ぼそうと企てた。

⁷アハシュエロス王の治世第十二年、第一の月、すなわちニサンの月に、ハマンの前でプル、すなわちくじが日ごと、月ごとに投げられ、第十二の月、すなわちアダルの月が選ばれた。

⁸ハマンはアハシュエロス王に言った。「王国の全州で、諸民族の間に散らされ、離れ離れに暮らしている一つの民族がいます。その法はこの民の法とも異なり、王の法令にも従いません。この民を放置することは、王の利益になりません。

⁹王がよしとされるなら、彼らを滅ぼす勅令を

お書きください。私は一万タラント^{*}の銀を、王の事務をつかさどる者たちに量り渡し、王の宝物庫に納めさせます。」

¹⁰王は手から印章の指輪を外し、ユダヤ人の敵であるアガグ人ハメダタの子ハマンに渡した。

¹¹王はハマンに言った。「その銀も、その民も、あなたに任せる。あなたのよいと思うようにせよ。」

¹²第一の月の十三日に王の書記官たちが召集され、ハマンの命じたことがすべて、王の総督、各州の長官、各民族の高官に宛てて、それぞれの州の文字、それぞれの民の言語で書かれた。書状はアハシュエロス王の名で記され、王の印章の指輪で封印された。

¹³書状は急使によって王の全州に送られた。それは、第十二の月、すなわちアダルの月の十三日という一日のうちに、若者も老人も、子どもも女も、すべてのユダヤ人を滅ぼし、殺し、絶やし、その財産を略奪せよというものだった。

¹⁴この文書の写しは、すべての民がその日に備えるよう、各州で法令として公示された。

¹⁵急使たちは王命によって急ぎ出発し、法令はスサの宮殿でも発布された。王とハマンは座って酒を飲んでいたが、スサの町は混乱に包まれた。

4

¹モルデカイは起こったことをすべて知ると、衣を裂き、荒布をまとい、灰をかぶった。そして町の中へ出て行き、大声で激しく嘆き叫んだ。

²彼は王の門の前まで来た。荒布をまとったまま王の門に入ることは、誰にも許されていなかったからである。

^{*} **3:93:9** 一タラントは約30キログラム、約66ポンド、または約965トロイオンスである

3 王の命令と法令が届いたどの州でも、ユダヤ人の間に激しい悲しみが起こり、断食と泣き声と嘆きが広がった。多くの者が荒布と灰の中に身を伏せた。

4 エステルの侍女たちと宦官たちが来てこのことを告げると、王妃は深く心を痛めた。彼女はモルデカイに衣服を送り、荒布を脱がせようとしたが、彼は受け取らなかった。

5 そこでエステルは、自分に仕えるよう王が任命した宦官の一人ハタクを呼び、何が起こり、なぜそうなったのかをモルデカイから聞くよう命じた。

6 ハタクは、王の門の前にある町の広場へ出て、モルデカイのもとへ行行った。

7 モルデカイは、自分に起こったことをすべて、またハマンがユダヤ人を滅ぼすため王の宝物庫に納めると約束した銀の正確な額を彼に話した。

8 さらに、ユダヤ人を滅ぼすためスサで発布された法令の写しを渡し、エステルに見せて事情を説明するよう頼んだ。そして王のもとへ行き、民のために王の憐れみを求め、願い出るよう強く求めた。

9 ハタクは戻って、モルデカイの言葉をエステルに伝えた。

10 エステルはハタクに、モルデカイへこう伝えるよう命じた。

11 「王の家臣も、王の諸州の民も皆知っています。男であれ女であれ、召されずに内庭の王のもとへ入る者には、死刑という一つの法しかありません。ただし、王が金の笏を差し伸べれば、その者は生きることができます。私はもう三十日も、王のもとへ召されていません。」

12 エステルの言葉がモルデカイに伝えられた。

13 するとモルデカイは、エステルにこう返すよう命じた。「自分は王宮にいるから、ほかのユダ

ヤ人が滅びても自分だけは逃れられるなどと考えてはならない。

14 この時にあなたが黙っているなら、ユダヤ人には別の所から助けと救いが起こる。しかし、あなたと父の家は滅びる。あなたが王妃の位に就いたのは、まさにこの時のためかもしれない。だれがそれを知ろう。」

15 エステルはモルデカイに、こう返事をするよう命じた。

16 「行って、スサにいるすべてのユダヤ人を集め、私のために断食してください。三日三晩、食べることも飲むこともしないでください。私も侍女たちと同じように断食します。その後、法に背くことになりますが、王のもとへ行きます。滅びるなら、滅びよう。」

17 モルデカイは去り、エステルが命じたことをすべて行った。

5

1 三日目、エステルは王妃の装いをし、王宮の内庭、王の広間の前に立った。王は王宮の中で、入口に向かって王座に着いていた。

2 王は王妃エステルが庭に立っているのを見ると、彼女を好意をもって迎え、手にしていた金の笏を差し伸べた。エステルは近づき、笏の先に触れた。

3 王は言った。「王妃エステルよ、どうしたのか。願いは何か。国の半分でも、あなたに与えよう。」

4 エステルは答えた。「王がよしとされるなら、私が王のために用意した祝宴に、今日ハマンとともにお越しください。」

5 王は言った。「エステルの願いどおりにするため、急いでハマンを呼べ。」こうして王とハマンは、エステルの用意した祝宴に赴いた。

6 ぶどう酒の宴で、王はエステルに言った。「あなたの願いは何か。かなえてやろう。求めは何か。国の半分でも、そのとおりにしよう。」

7 エステルは答えた。「私の願いと求めは、こうです。」

8 もし私が王の好意を受け、私の願いをかなえ、求めを聞くことを王がよしとされるなら、私が用意する祝宴に、明日も王とハマンにお越しく下さい。その時、王のお尋ねにお答えいたします。」

9 その日、ハマンは喜び、心満ち足りて出て行った。ところが王の門でモルデカイを見ると、彼が立ち上がりもせず、自分の前で身じろぎもしないので、モルデカイへの怒りに満たされた。

10 それでもハマンは自分を抑えて家に帰り、人を遣わして友人たちと妻ゼレシュを呼び集めた。

11 ハマンは彼らに、莫大な富、多くの息子、王が自分を昇進させ、王の高官や家臣より高くしたことを残らず語った。

12 さらにハマンは言った。「しかも王妃エステルは、自分が用意した祝宴に、王とともに私だけを招いた。明日もまた、王とともに招かれている。」

13 だが、あのユダヤ人モルデカイが王の門に座っているのを見るかぎり、これらすべてがあっても、私には何の満足もない。」

14 妻ゼレシュと友人たちは皆言った。「高さ五十キュビット*の木柱を立てさせなさい。明朝、モルデカイをそれに掛けるよう王に願い出て、それか

* 5:14 5:14 キュビットは、大人の男性の腕の中指の先から肘までの長さで、約18インチ

ら王とともに喜んで祝宴へ行きなさい。」この提案はハマンの心にかない、彼は木柱を立てさせた。

6

¹ その夜、王は眠れなかった。そこで年代記を持って来させ、王の前で読み上げさせた。

² そこには、入口を守る王の宦官ビッグタナとテレシュの二人がアハシュエロス王に手を下そうとした企てを、モルデカイが告発したことが記されていた。

³ 王は尋ねた。「この功績に対して、モルデカイにどんな栄誉と顕彰が与えられたか。」王に仕える侍臣たちは答えた。「何もなされておりません。」

⁴ 王は言った。「庭にいるのは誰か。」その時ハマンは、自分が用意した木柱にモルデカイを掛けるよう王に願い出るため、王宮の外庭に入ってきていた。

⁵ 侍臣たちは王に言った。「ご覧ください、ハマンが庭に立っています。」*王は言った。「入らせよ。」

⁶ ハマンが入って来ると、王は尋ねた。「王が栄誉を与えたい者には、どうするのがよいか。」ハマンは心の中で思った。「王が私以上に栄誉を与えたい者がいるだろうか。」

⁷ ハマンは王に答えた。「王が栄誉を与えたい者には、

⁸ 王がお召しになった王服と、王がお乗りになり、頭に王冠を載せた馬を持って来させてください。

⁹ その王服と馬を、王の最も高貴な高官の一人に預け、その者に、王が栄誉を与えたい人へ王

* 6:56:5 「ご覧ください」に当たるヘブル語הִנֵּהは、「見よ」「注目せよ」などの

服を着せさせ、馬に乗せて町の広場を進ませてください。そしてその前で、『王が榮譽を与えたい者には、このようになされる』と宣言させてください。」

10 王はハマンに言った。「急いで、あなたが言ったとおり王服と馬を取り、王の門に座っているユダヤ人モルデカイにそのようにせよ。あなたの言ったことを一つも省いてはならない。」

11 ハマンは王服と馬を取り、モルデカイに王服を着せ、馬に乗せて町の広場を進ませ、その前で「王が榮譽を与えたい者には、このようになされる」と宣言した。

12 モルデカイは王の門へ戻った。一方ハマンは、嘆きながら頭を覆い、急いで家へ帰った。

13 ハマンは妻ゼレシュとすべての友人に、自分に起こったことを残らず語った。すると知者たちと妻ゼレシュは言った。「あなたがその前で敗れ始めたモルデカイがユダヤ人の子孫なら、あなたは彼に勝てません。必ず彼の前に倒れます。」

14 彼らがまだ話しているうちに王の宦官たちが来て、エステルの用意した祝宴へハマンを急いで連れて行った。

7

1 こうして王とハマンは、王妃エステルの祝宴に臨んだ。

2 二日目のぶどう酒の宴でも、王はエステルに言った。「王妃エステルよ、願いは何か。かなえてやろう。求めは何か。国の半分でも、そのとおりにしよう。」

3 王妃エステルは答えた。「王よ、もし私があなたの好意を受け、王がよしとされるなら、私の願い

として私の命をお与えください。私の求めとして、私の民をお救いください。

4 私も私の民も、滅ぼされ、殺され、絶やされるために売られたからです。もし男女の奴隷として売られただけなら、私は黙っていたでしょう。たとえ敵が王の損失を償えないとしてもです。」

5 アハシュエロス王は王妃エステルに尋ねた。「それをしようと大胆にも企てた者は誰だ。どこにいるのか。」

6 エステルは言った。「その敵、その仇は、この悪しきハマンです。」ハマンは王と王妃の前で恐れおののいた。

7 王は怒りに燃え、ぶどう酒の宴から立ち上がって宮殿の園へ出て行った。ハマンは王妃エステルに命乞いをしようと残った。王が自分を滅ぼすと決めたのを悟ったからである。

8 王が宮殿の園から宴の広間へ戻ると、ハマンはエステルのいる寝椅子に身を投げ伏していた。王は言った。「この家で、しかも私の前で、王妃を辱めようとするのか。」王がこの言葉を発すると、人々はハマンの顔を覆った。

9 王に仕える宦官の一人ハルボナが言った。「ご覧ください。王のために功を立てたモルデカイを掛けようとハマンが作った、高さ五十キュビット*の木柱が、ハマンの家に立っています。」王は言った。「ハマンをそれに掛けよ。」

10 こうして人々は、ハマンがモルデカイのために立てた木柱にハマンを掛けた。すると王の怒りは静まった。

* **7:97:9** キュビットは、大人の男性の腕の中指の先から肘までの長さで、約18インチ、

8

¹ その日、アハシュエロス王は、ユダヤ人の敵ハマンの家を王妃エステルに与えた。モルデカイも王の前に出た。エステルが、彼は自分の身内であると王に明かしたからである。

² 王はハマンから取り戻した印章の指輪を外し、モルデカイに与えた。エステルはモルデカイをハマンの家の管理者とした。

³ エステルは再び王の前で語り、その足もとにひれ伏した。そして涙ながらに、アガグ人ハマンの悪意と、彼がユダヤ人に対して企てた計略を取り除いてくださるよう願った。

⁴ 王がエステルに金の笏を差し伸べると、エステルは立ち上がって王の前に立った。

⁵ 彼女は言った。「王がよしとされ、私が王の好意を受け、このことが王に正しいと見え、また私が王の心にかなうなら、アガグ人ハメダタの子ハマンが王の全州にいるユダヤ人を滅ぼすために書いた書状を取り消す文書をお書きください。」

⁶ どうして私は、自分の民に災いが降りかかるのを見ていられましょう。どうして自分の同胞が滅ぼされるのを見ていられましょう。」

⁷ アハシュエロス王は王妃エステルとユダヤ人モルデカイに言った。「見よ、私はハマンの家をエステルに与えた。また、ハマンはユダヤ人を滅ぼそうとしたため、木柱に掛けられた。」

⁸ あなたがたは、ユダヤ人のためによいと思うことを王の名で書き、王の印章の指輪で封印せよ。王の名で書かれ、王の印章の指輪で封印された文書は、誰にも取り消せないからである。」

⁹ そこで第三の月、すなわちシワンの月の二十三日に、王の書記官たちが召集された。モルデカイの命じたことがすべて、インドからエチオピア

に至る百二十七州のユダヤ人、総督、長官、諸州の高官に宛てて書かれた。それぞれの州にはその文字で、それぞれの民にはその言語で、ユダヤ人にもその文字とその言語で記された。

¹⁰ モルデカイはアハシュエロス王の名で書き、王の印章の指輪で封印した。そして王室の駿馬に乗る急使たちに書状を託した。

¹¹ その書状で王は、各町のユダヤ人が集まって命を守り、彼らを攻撃する民や州のすべての武装勢力を、その子どもや女たちもろとも滅ぼし、殺し、絶やし、その財産を略奪することを許した。

¹² その日は、アハシュエロス王の全州で同じ一日、すなわち第十二の月、アダルの月の十三日と定められた。

¹³ この文書の写しは、すべての民に公示される法令として各州で発布され、ユダヤ人がその日に敵へ報復する備えをするよう命じた。

¹⁴ 王室の駿馬に乗る急使たちは、王命に促され、急いで出発した。法令はスサの宮殿でも発布された。

¹⁵ モルデカイは青と白の王服を着て、大きな金の冠をかぶり、上等の亜麻布と紫の外套をまとうて、王の前から出て来た。スサの町は歓声を上げ、喜びに満ちた。

¹⁶ ユダヤ人には光と喜び、歓喜と誉れがあった。

¹⁷ 王の命令と法令が届いたどの州、どの町でも、ユダヤ人には喜びと歓喜、祝宴と祝いの日があった。地の諸民族の多くがユダヤ人となった。ユダヤ人への恐れが彼らをとらえたからである。

9

¹ 第十二の月、すなわちアダルの月の十三日、王の命令と法令が実行される日が来た。ユダ

ヤ人の敵は彼らを打ち負かそうと望んでいたが、事態は逆転し、ユダヤ人が自分たちを憎む者を打ち負かした。

²ユダヤ人はアハシュエロス王の全州にある自分たちの町々に集まり、害を加えようとする者たちに手を下した。誰も彼らの前に立つことができなかった。ユダヤ人への恐れがすべての民をとらえたからである。

³諸州の高官、総督、長官、王の事務をつかさどる者たちは皆、ユダヤ人を助けた。モルデカイへの恐れが彼らをとらえたからである。

⁴モルデカイは王宮で重んじられ、その名声は全州に広まった。このモルデカイという人は、ますます勢力を増していった。

⁵ユダヤ人は剣で敵をことごとく打ち、殺し、滅ぼし、自分たちを憎む者を思うままにした。

⁶スサの宮殿で、ユダヤ人は五百人を殺して滅ぼした。

⁷パルシャンダタ、ダルフォン、アスパタ、

⁸ポラタ、アダルヤ、アリダタ、

⁹パルマシュタ、アリサイ、アリダイ、ワエザタ、

¹⁰すなわち、ユダヤ人の敵ハメダタの子ハマンの十人の息子を殺した。しかし略奪品には手を伸ばさなかった。

¹¹その日、スサの宮殿で殺された者の数が王に報告された。

¹²王は王妃エステルに言った。「ユダヤ人はスサの宮殿で五百人を殺して滅ぼし、ハマンの十人の息子も殺した。王のほかの州では、どれほどのことをしただろう。さて、あなたの願いは何か。かなえてやろう。さらに何を求めるのか。そのとおりにしよう。」

13 エステルは答えた。「王がよしとされるなら、スサのユダヤ人に、明日も今日の法令どおりに行うことをお許しください。また、ハマンの十人の息子を木柱に掛けさせてください。」

14 王はそのようにせよと命じた。法令がスサで発布され、ハマンの十人の息子は木に掛けられた。

15 スサのユダヤ人はアダルの月の十四日にも集まり、スサで三百人を殺した。しかし略奪品には手を伸ばさなかった。

16 王の諸州にいたほかのユダヤ人も集まり、命を守り、敵を退けて安息を得た。彼らを憎む者七万五千人を殺したが、略奪品には手を伸ばさなかった。

17 これはアダルの月の十三日のことである。十四日には休み、その日を祝宴と喜びの日とした。

18 しかしスサのユダヤ人は十三日と十四日に集まり、十五日に休んで、その日を祝宴と喜びの日とした。

19 それゆえ、城壁のない町々に住む地方のユダヤ人は、アダルの月の十四日を喜びと祝宴の祝いの日とし、互いに食べ物を贈り合う日としている。

20 モルデカイはこれらの出来事を書き記し、近くにも遠くにも、アハシュエロス王の全州にいるすべてのユダヤ人へ書状を送った。

21 そして毎年、アダルの月の十四日と十五日を守るよう定めた。

22 それはユダヤ人が敵を退けて安息を得た日々であり、悲しみが喜びに、嘆きが祝いの日に変わった月であった。彼らはその日々を祝宴と喜びの日とし、互いに食べ物を贈り合い、貧しい者に贈り物をする日とした。

23 ユダヤ人は、自分たちが始めたこの習慣と、モルデカイが書き送ったことを受け入れた。

24 すべてのユダヤ人の敵であるアガグ人ハメダタの子ハマンが、ユダヤ人を滅ぼそうと企て、彼らを打ち碎き、絶やすためにプル、すなわちくじを投げたからである。

25 しかしこのことが王に知られると、王は書状によって、ハマンがユダヤ人に対して企てた悪い計略を彼自身の頭上に返し、彼と息子たちを木に掛けるよう命じた。

26 このため、プルという言葉にちなんで、これらの日はプリム*と呼ばれた。この書状に記されたすべてのこと、彼らがこの件について見たこと、そして彼らの身に起こったことに基づき、

27 ユダヤ人は自分たちと子孫、また彼らに加わるすべての者のために、毎年この二日を、記されたとおり、定められた時に必ず守ることを定め、義務として引き受けた。

28 これらの日は、すべての世代、すべての家族、すべての州、すべての町で覚えられ、守られなければならない。プリムの日がユダヤ人の間から廃れることなく、その記憶が子孫†から消え去ることのないためである。

29 アビハイルの娘である王妃エステルとユダヤ人モルデカイは、プリムについてのこの第二の書状を確定するため、全権をもって書き送った。

30 モルデカイは、アハシュエロスの王国百二十七州のすべてのユダヤ人に、平和と真実の言葉を記した書状を送った。

31 そして、ユダヤ人モルデカイと王妃エステルが定めたとおり、またユダヤ人が自分たちと子孫のため、断食と嘆きについて定めたとおり、プリムの日々をその定められた時に守ることを確定した。

* 9:26 9:26 プリムは、ヘブル語で「くじ」を意味するプルの複数形である。

† 9:28 9:28 または「種」。

³² エステルの命令によってプリムに関するこれらの事柄は確定され、書物に記された。

10

¹ アハシュエロス王は、本土と海の島々に貢ぎを課した。

² 王の権勢と武勇のすべての業、また王がモルデカイを高くしたその偉大さの詳しい記録は、メディアとペルシアの王たちの年代記に記されているではないか。

³ ユダヤ人モルデカイはアハシュエロス王に次ぐ者となり、ユダヤ人の間で重んじられ、多くの同胞に愛された。彼は自分の民の幸福を求め、そのすべての子孫に平和を語った。

フリーダム・バイブル
**The Holy Bible in the Japanese Language, Freedom
Bible translation**

Public Domain

Language: 日本語 (Japanese)

この聖書翻訳には著作権が設定されていません。この聖書翻訳の公式な配布元は eBible.org です。これは翻訳の草案です。この聖書翻訳をより良いものにするため、改善のご提案を ebible.org+jpnm@gmail.com までお寄せください。

2026-07-24

PDF generated using Haiola and XeLaTeX on 29 Jul 2026 from source files dated 24 Jul 2026

8daadcbf-1b7a-51a2-98ce-7e95a9e95424